ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「ニューラ、氷の礫！」

「カラにこもる！」

　勢いよく飛んでくる氷が、オレンジ色の甲羅に当たって砕け散る。

　イトマルを倒したゼニガメに、次に神楽が繰り出したのは、鋭い鉤爪を持った黒い猫のようなポケモン、ニューラだった。雅也は交代せずに、そのままゼニガメで相手をしている。そのまま戦っている内に、二人と二匹は、川岸から近い所にある森の中に入っていた。

　形勢はニューラの方に傾いている。まぁ、当然といえば当然だ。ゼニガメはさっきまでイトマルと戦い、心身共に消耗しているのだから。加えて、イトマルの糸が未だ尚ゼニガメの体を拘束している。これでは、木々の間を素早く飛び回りながら『氷の礫』を連射するニューラのスピードにはついていけるはずもない。一応、まだ殻に篭って攻撃を防いではいるものの、ゼニガメが出来るのはここまでだった。いくら殻に篭っているとは言え、攻撃による衝撃は通るし、そもそも毎回ちゃんと攻撃が防げるかというと――

「よし！　今だ！」

「あぁっ！」

　勿論そういうわけではない。現に、今ゼニガメの顔面に、ニューラの『氷の礫』がヒットした。そして続けざまに、ニューラの『切り裂く』がゼニガメの胴体に命中する。あっけなく倒れ、ゼニガメは気絶した。

「ゼニガメ、ありがとう。よく頑張った！」

　そう言いながら、未だこれが夢での出来事だと思っている雅也はゼニガメをボールに戻し、そのまま他のボールをいくつか取り出す。先程までの戦いで、ゼニガメ以外のポケモンも目を覚ましたらしい。だが、その目に眠りを妨げられたことによる怒りは無い。全員、神楽と戦えることを期待するような目で、主人を見上げていた。暫くそのボールをジッと見つめた後、一つを選んで前に投げる。

「ヒトカゲ、ゴー！」

　この間捕まえたばかりのポケモンだが、最近はバトルにも慣れてきているので、雅也はこのポケモンを選んだ。相性的には、ヒトカゲの方が有利である。氷タイプには、炎技が効果は抜群だ。勿論、攻撃が当たれば、の話だが。

　ちなみに余談ではあるが、これが身内の相手以外での、ヒトカゲの初陣だったりする。

「ヒトカゲ、火の粉！」

　雅也がそう叫ぶと、ヒトカゲがニューラに向かって火の玉を吐いた。だが当然のことながら、ニューラはそれをヒョイっと躱す。そのまま木々の間を高速で飛び回り、今や黒い残像が飛び交っているようにしか見えない。夜の薄暗さも相まって、戦っているヒトカゲからすれば、どこにニューラがいるのか分からない状態に陥っていた。良助のポケモンが、ややキレのある、スピードの速い戦い方をするお陰で、何度も彼と戦っている雅也ですら、偶にニューラを見失う程の動きだ。この間の密猟者の使ったライフルから放たれる銃弾の方が、動きが直線的なせいか、まだ見える。流石忍者っぽい格好をしているだけはあると、この時雅也とヒトカゲは思った。

「ニューラ、氷の礫！」

　当然のことながら、ニューラのトレーナーである神楽は、その動きを正確に目で追えるらしい。ニューラがヒトカゲの背後をとるタイミングで、正確に指示を出す。

　だが、肝心の小さな氷の塊による攻撃は、ヒトカゲの尻尾の炎によって、そのサイズをさらに小さくする。命中はしたものの、ヒトカゲがダメージを受けたような様子は無い。

「もう一発！」

　ならば横からと、これまた絶妙なタイミングで指示を出す神楽だが、それはヒトカゲも雅也も読んでいた。飛んできた攻撃を、体を仰け反らせ、紙一重で躱す。その時、一瞬だけだが、ヒトカゲの視界がニューラの姿をはっきりと捉えた。だが、攻撃する余裕は無い。とは言え、時間的余裕があっても、恐らく今のタイミングでは、ヒトカゲは攻撃出来なかったであろう。本来なら余裕を持って避けるはずだった雅也とヒトカゲからすると、今のは少しヒヤッとした。

　対して神楽とニューラは、攻撃が当たらなかったことで慌てる様子もなく、同じ戦法を続ける。違うのは、攻撃のタイミングだけだ。後ろからは無理だと踏んだのか、左右からの『氷の礫』を中心に、時折前方からも氷を飛ばす。

だが、的を絞らせないその攻撃にも、雅也とヒトカゲはしっかりと対応していた。木々の高さが皆近いので、的を絞らせないとは言え、攻撃のラインは彼等にも予想がつくのだ。タイミングは、神楽の声がはっきりと教えてくれている。それでも、雅也達には、神楽達の戦い方には感心せずにいられなかった。パッと現れ攻撃しては、あっという間に姿をくらますその戦術は、まさに忍者の戦い方だ。実際忍者を相手にしたことの無い雅也達にも、それが分かった。

とは言え同時に、雅也は神楽の戦い方に、隙も見出していた。スピードに任せた、的を絞らせない攻撃は見事だが、どうも、攻撃を指示するタイミングがやや単調だと雅也は思ったのだ。このスピードで正確なタイミングでニューラに指示を出せているにも関わらず、ニューラの速すぎるスピードのせいで余裕が無いのか、ニューラがヒトカゲの隙をついたと思った時に必ず、攻撃の指示を出す。要は、フェイントのようなものが無いのだ。ニューラもニューラで、ずっと木の上を、枝伝いに飛び回っているだけだ。偶に方向転換するくらいである。

それが長い時間続くと、いくら目では追えないとは言え、流石にヒトカゲも相手の動きに慣れてくる。ついさっきまでは神楽の攻撃の指示を聞くのに、全神経を傾けて注意を払っていたものの、今はそうしていない。癖なのか何なのかは分からずとも、それのお陰で、今やヒトカゲはわざとニューラに隙を見せて、攻撃を誘っていた。

「くっ……もう一発！」

　流石に当たらなさすぎたのか、だんだんと指示を出す神楽の声に焦りの色が見える。ニューラもニューラで、少し『氷の礫』の狙いがブレ始めていた。こちらも、焦っているのだろう。地面に降りて接近戦に持ち込む作戦も彼等には無いわけではないが、何せ相手は炎ポケモン。迂闊に接近戦に持ち込んで、うっかり事故って炎技を受けたりでもすれば、泣くに泣けない。

　とは言え、焦っているのはヒトカゲも同じだった。ちゃんとポケモンバトルを始めてから、まだ二ヶ月も経っていないせいか、集中力がそろそろ怪しくなってきたのだ。このままだと、いつか攻撃を避け損なって、クリーンヒットを貰う。

　当然このことは雅也も分かってはいた。だが、こっちもこっちで、相手に攻撃を当てる手段が皆無なのだ。迂闊に『火の粉』を吐いてしまい、万が一外れでもしてしまえば、大きな隙を見せる事になるのは明白だった。

　さて、どうする……？

　この時、二人と二匹は同時に同じ事を考えていた。